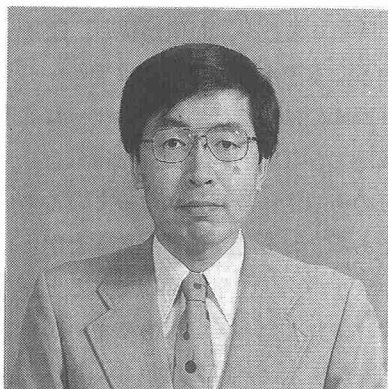


## 1年半遅れの新任挨拶

山本正幸(生物化学教室)



昨年6月に医科学研究所より生物化学教室に赴任して以来、新任の挨拶を広報に書くようにとのお誘いを幾度も受けつつ、ほぼ1年半が経過してしまっただけで、特に深い意図があったのではない。とにかく時間がとれなかった、というのが実状である。最後通告に近い寄稿依頼を受けて、予期せず休日となった11月の一日をこの小文の作成に充てることとした。

着任しての感想を兼ねて、どうしてこうも時間がないのかということを考えてみたい。私は常々やるべき仕事を書き出しておき、優先度に応じて片付けていくことにしている。優先度の最も高いのは、研究に関する事柄である。我々の研究室で成し遂げたオリジナルな研究成果の発表、特に生命科学の分野では国際誌に英文で論文を発表することが一連の研究の締めくくりであり、極めて重要な務めである。それは科学者としての存在の根幹に関わる営為といってもよい。また、定期的に大学院生・スタッフの諸君と実験結果を検討し、研究方針を討議すること、さらには、できる限り避けたいことではあるが、研究費確保のための様々な活動にも高い優先度が割り当てられる。次に教育関係の活動がある。次代を担う学生諸君に自

分が知り得、体系化してきた知識を伝え、彼らの成長の礎として貫くことは、年長者の務めであり、また楽しみでもあるが、そこに費やすエネルギーは正直なところかなり多大なものである。修士論文・博士論文の審査の時期にはことに大きな時間がそこに割かれることになる。

私自身がやるしかないが、研究・教育に直接関わらない事柄、あるいは研究・教育に関わることも、補助の人をお願いすれば十分こと足りるはずの(しかし結局は私が片付ける)事柄が、いわゆる「雑用」である。これらをいかに少なくして論文を書く時間を確保するか、というのが日々頭を痛める課題である。学会活動、和文で総説を書くこと、辞典の編集などは「本務」と「雑用」の中間であり、どの程度を引き受けるかの判断が難しい。そのような仕事はしばしば新幹線の車中に持ち込まれることとなる。また、一度も見たことがなく、誰が利用するのかも知らないような年鑑に研究の概要を書くことなども、大学の事務機構を通じて降りてくれば無視する訳にはいかない。研究費に直結していても、科学研究費の申請書をコピーし、のり付けし、穴をあける(細かく指示された通りに)というようなことは限りなく「雑用」に近いものに認識される。

次々に押し寄せる「雑用」をこなし、教育の義務を果たし、しかも国際競争から落伍しないように研究面で目いっぱい頑張りをやる、ということで日々の時間が消費されていく。自分自身でまとまった実験をする時間はとうとう無くなってしまったが、論文を書くための時間にも様々な用がぐいぐい込んでくる昨今の状況はまさしく危機といってよい。私個人については問題は二重である。ひとつは専属の秘書あるいは補佐役がないことであ

る。私が学生の頃、すなわち20年少し前には、当生物化学教室の研究室には秘書の籍がひとつずつ配属されていた。それが定員削減のあおりでどこかに消えてしまった。週に一度アルバイトの人を頼んで、研究室の経理事務だけは片付けて貰っているものの、日々飛び込んでくる仕事には自力で対応するしかない。グループとして活動する限り不可欠ではあるが、助手の人や大学院生に頼むのは筋違いの事務的業務はいくらもあり、また外国との交流が増えるにつれ、実験材料や情報の提供依頼に対する送付業務、訪問客の宿泊の手配なども増加の一途である。このような業務を的確に処理できる秘書の存在は、グループにとって大きな戦力であり、間接的にグループの研究能力を左右しているといっても過言ではない。欧米の教授には秘書を二人もつ人も珍しくはないし、学会活動に備えて三人の秘書をもつ人もいる。振り返って我国では、今や秘書籍で使える定員枠がほとんど無いこと、乏しい研究費を使って安定な雇用関係など結びようもないことなどの理由で、古参の教授か、企業から定常的な支援が見込まれるような教授でないと専用秘書をもつのは難しいのが実状であろう。研究補佐活動の重要性、それに携わる人への十分な処遇の必要性を改めて訴えておきたい。

問題が二重だといったことの二点目は、事務補佐が見込まれないにもかかわらず、例えば科学研究費の配分の仕方がいっこう改善されず、毎年研究費申請のために多くのエネルギーを割くことを余儀なくされているような状況があることである。日本では個々の研究基金（グラント）の大部分が少額で、しかも実質1年間のものである。会計年度の単年度制など、国の基本原則に絡む問題であるらしいが、毎年毎年幾つもの作文をし、その間はほとんど他の仕事を手につかない申請者側にとっても、またそれを審査する側にとっても、大きなエネルギーの無駄使いとしかいいようがない。特別推進研究などとして祭りあげることなく、ごく普通に3年あるいは5年間、それだけあれば研

究費のことは心配せずに研究に打ち込めるような研究基金の制度を一日も早く実現してほしいものである。

ことのついでにもうひとつ不平不満を言っておこう。それは理学部の物理的な研究環境の劣悪さである。おそらく教授会メンバーはそんなことは百もご承知であろう。面積が狭い、建物が老朽化している、水道水は鉄錆だらけ等々。あえてここで繰り返すのは、着任当初このような状況には一日も我慢できないと思っていた自分自身が、いつしかその劣悪さに無感覚になっているのに気付くからである。おそらく進学してきた学生諸君は、これが天下の東大、学問の府であると疑うこともなく受け入れているのではあるまいか。昔にくらべて機器類では諸外国に遜色なくなってきているが、建物・施設にたいするアメリカからきた連中の卒直な感想は「こんなところでサイエンスができるのか」ということに尽きる。研究は外見だけではない、と反論することは容易であろう。しかしとにかく、外国からの訪問者を、公衆トイレでももう少しましではないかと思われる理学部3号館のトイレに案内する時は、「恥の文化」もくそもなく、恥ずかしいとしかいいようがない。しかもこの劣悪さは、なにも外国との比較においてのみではない。例えばある日本の発酵関係の企業は近代的な研究所を構え、一社で文部省の科学研究費総額の数分の一を研究に投資している。また、民間企業体や財団に支えられた研究所には、スペース、調度、設備等の点で、まさに「日本の経済力」を反映しているようなところも珍しくない。大学は大きく取り残されているのである。

文句ばかり並べ立てて、一体おまえはなんで理学部にきたのだ、とお叱りを受けそうである。理由はただひとつ、学生諸君の資質と将来性に賭けているということである。名実ともに学問の府と誇れる日を目指して、ともに頑張っていきたい。